

子どもがものを「欲張る」ことの意味

3 歳児の姿を通してものを「欲張る」背景と教師の援助を考える

静岡大学教育学部附属幼稚園 田宮 縁

1 目的

ある子どもの「欲張る」姿を見て、数年前、今は退職された先輩の先生方から聞いた、「欲張る時期を通過して、子どもは徐々に欲張らなくなり、友だちにもわけてあげられるようになる」という言葉を思い出した。「欲張る」ことを肯定的に捉えたその言葉を、私は「そういうものなのか」と思いながらも、その時は深く考えることはなかった。

本報告においては、対象児 M 子の保育記録を積み重ね、3 歳児が「幼稚園が安心して過ごせる場となり、自分を出しながら遊ぶ」ようになる過程をものを「欲張る」姿の変化を軸に分析する。つづいて M 子の資料と他の子どもの事例をあげながら「欲張る」ことは子どもの発達においてどのような意味があるのかを明らかにすることを目的とする。さらに、その中で教師の援助についても検討していく。

2 視点と方法

(1) 分析の視点

子どもの「欲張る」姿は、自我の拡大の過程の時期に表れるものである。保育の現場では、早い時期から一人に分け与える素材の量を保育者側でコントロールをしたり、大人の価値観を押し付け協調性を子どもの求めたりする傾向があるように感じる。しかし、その「欲張る」姿を肯定的に捉え、保証していくことで、幼稚園生活が安心して過ごせる場となり、自分を出しながら遊べるようになるのではないかと考え、保育に取り組んできた。そこで本報告では、ものを「欲張る」時期から、ものを「欲張らない」時期というように大まかな仮説を立て、ものを「欲張る」姿が強く私の目にとまった M 子の縦断的变化を分析していくとした。

(2) 方法

①対象児

- a) ものを「欲張る」姿が気になった M 子
- b) 子どもらしいものを「欲張る」姿を見せた男児 2 名。この 2 名の事例は「欲張る」ことの発達の意味について考える資料とする。

②資料収集の方法

担任である私の保育記録。M 子の 20 のエピソードを積み上げ資料とした。また園内研修日における他の担任の撮影した VTR を記録におこした。

(3) 結果と考察

主なエピソードのタイトルを以下に示す。これは私がエピソードを一言で言い表わしたものである。

ものを「欲張る」時期

ep.4 小麦粉粘土が心の支えに一量にこだわる(5/8~)

5 色水作り

—たくさん作るがうれしそうではない(5/15)

8 教師との一対一のかかわりを求めて(6/5)

ものを「欲張らなくなった」時期

10 信頼から見通しへー待つこと(9/4)

12 量より質—自分で捕まえたことへの価値(9/7)

13 友だちとつながる(9/12)

15 「ぶつけた」「痛い」

—一本当の願いは受け止めて欲しい(9/19)

17 イメージが出来上がると欲張らなくてもいい

(10/9)

18 少ない量なら少ないなりの工夫(10/16)

19 甘えの受容から友だちとの遊びへ(1)(10/23)

(1) M 子の育ち

①変容のきっかけ

M 子との山作りをきっかけ（エピソード 8）に、遊びが目的ではなく私と一緒にいることが目的なのではないかと私が考え始めたころから、M 子の欲張りはなくなってきた。私が M 子の気持ちを理解できたことが 2 人の関係を変え、私が実際にそばにいなくても、いつでも受け入れてもらえる実感を持つことができたように思う。その実感を持つことで、M 子は欲張るという形で自己主張する必要がなくなった。それ以降の M 子は、私がいつも受け入れてくれるという安心感のもと、ものを欲張るのではなく、他のことへも興味や関心が広がっていった。

②M 子の遊びの変化（色水作り）

私の傍らで手伝いをしながら、友だちとのかかわりを楽しんでいたが、J 男とのやり取りをきっかけに、

友だちのやっている色水の机へ移動した。」男の「ありがたい」という言葉に、M 子の気持ちが動いたのだ。色水をビニール袋に入れた姿から、M 子の心が友だちに向き、つながったように思えた。

一学期は、私とかかわりたいためにたくさんの色水を作り、フィルムケースに入れるように要求してることが多かった（エピソード 5）が、エピソード 13を見ると、M 子の私へのかかわり方がストレートになってきていることがわかる。また、私を通して友だちとのかかわりも出てきた。そして、友だちからの「ありがたい。」という言葉が、大人が想像する以上に M 子にとってはうれしいことだったのだろう。そのうれしさが色水作りの机に M 子を引き戻したと考えることができる。最後に色水をフィルムケースではなく、ビニール袋に入れた行動からは、友だちを意識して、同じようにしたいという思いがあったと捉えた。

③まとめ

以下に M 子の育ちをまとめてみる。

- ・ 欲張ることで教師とのかかわりを求めるのではなく、一緒にいたい時には、言動で自分を表現できるようになってきた。
- ・ 教師との一対一の結びつきを求めるのではなく、友だちとのかかわりが徐々に出てきて、友だちとのかかわりに気持ちが向くようになった。
- ・ 夢中になれる遊びが見つかり、目的を持って登園するようになった。

（2）教師の援助について

2 学期の保育記録を積み重ねて見ると、夢中になれる遊びが見つかり、目的を持って登園する M 子の姿を見ることができる。また教師との一対一のかかわりではなく、教師を通して友だちとのかかわりを求めていることがわかった。欲張ることで自己表現をする必要がなくなった M 子ではあるが、友だちとのトラブル、遊びに入り込めないなど、教師に甘えたい時、ここが痛い、あそこが痛いと言きながら何度も訴えてくることがある。私はその言葉をそのまま受け取り、保健室へ連れていくという方法しかとらなかった（エピソード 15）。しかし、そこで保健室へ連れていかなくても、私が「どこが痛いの？」と聞き、M 子の気持ちを受け止めることだけでも、M 子が自分の力で歩き出すことができるのではないかと考え、対応を変えた（エピソード 19）。M 子にとって教師は心の安定の基地である。ずっと教師と一緒にいたいためにものを欲張ることから、甘えたい時に「痛い。」と泣いて訴

えてくることへ M 子の表現方法が変化してきたことがわかった。その痛みも、私一人が受け止めれば満足する場合、養護教諭にも受け止めて欲しい場合があり、その訴え方で、M 子の心の状態を想像することができる。自分の中で解決できない問題が起こった時、ただ「痛い。」と泣いて問題から逃げるのではなく、自分の声で、自分の言葉で、友だちに自分の思いを訴えたり、遊びを自分のものにしていったりすることが、今の M 子の課題である。M 子の気持ちを受け止めながらも、M 子が自分の力でつまずきを乗り越えていけるような声掛けを、タイミングを見計らいながら行っていきたい。

M 子を通して、私は、教師としては当たり前のことかも知れないが、子どもの要求に応じ、手をかえ、品をかえ、その場その場で試行錯誤することで、子どもの気持ちが見えてくるということを実感した。表面的に遊びを見ていたら、子どもの気持ちを理解することはできなかっただろう。試行錯誤に要した時間は、今考えてみると無駄な時間ではなく、子どもの成長教師の成長につながったと考えることができる。結果をすぐに求めるのではなく、日々の営みを大切にすること、子どもを大切に思う教師の気持ちが子ども理解につながるのだと確信した。

（3）「欲張る」ことの意味

N 男、C 男の姿から「欲張る」ことは、自分の我を通すことであり、自己主張の一つでもあると私は考えた。子どもが「欲張る」時は、できのよいものを作るというよりも数や量に興味に向いていたり、自分の作りたいもののイメージがはっきりとしていなかったり、作り方がわからずとりあえず素材を確保したりすることが考えられる。また、表面的にはものを欲張っているが、その背景には教師の気持ちを欲張りたかった M 子のような場合もあり、個々の子どもの欲張る背景にあるものを教師は丁寧に見ていく必要がある。いずれにせよ、「欲張り」は子どもの発達段階において表れる大切な自己主張の一つであるということがわかってきた。

自分が主人公になれる遊びを通して新しい自分に会えた時、肩の力がぬけ、「欲張る」ことで自己主張をする必要はなくなるのだろう。ある時期の「欲張り」は、子どもの発達にとって必要なことである。このように考えた時、先輩が語っていたことを私なりに解釈することができた。